

がん緩和ケア

【質問】私の父親はがんの治療中です。医師から「痛みが強くなれば、麻薬を使うことも考えましょう」と話がありましたが、不安です。痛みの治療法について教えてください。
(48歳・男性)



疼痛治療には主に医療用麻薬を使用します。患者や家族の多くは、麻薬について「がん末期の最後の手段」「中毒になる」「麻薬になる」「命が縮む」などの偏見を持っています。しかし、麻薬も適切に投与すれば、中毒にならず、寿命を延ばすことができます。麻薬はがん早期から投与されるべきなのです。

麻薬で苦痛を除去

【回答】痛みは、人を肉体的に苦しめる最も大きなものの一つです。がんの患者は、痛みや呼吸困難などの身体的苦痛や精神的苦痛、さらには家族との関係など社会的苦痛をも背負っています。そんな中で苦痛が的確に取り除かれると、患者はその瞬間から一日一日を豊かに暮らすことができます。わが国ではこれまで、が

んの痛みを取り除くことはあまり重視されず、痛みの治療はがん末期に行われるのが普通でした。日本は「がん疼痛（とうつう）治療法」は後進国なのです。そこで国は二〇〇七年四月にがん対策基本法を制定し、がん緩和ケアの普及と早期からのがん緩和ケアの実践を打ち出しました。目的は患者の身体的な苦痛や精神的苦痛だけでなく、家族のさまざまな苦痛も和らげることにあります。緩和ケアの中心は、やはり患者の痛みに対する治療になります。患者ががんの痛みから解放されることにより、日常生活が豊かになるばかりか、がん本体に対する化学療法や放射線療法などもうまく行えるようになります。

本県でも普及事業展開

がん治療に携わる医師は、がん疼痛治療法に習熟しなければいけません。そして、疼痛治療は病院だけでなく、在宅でも行われる必要があります。治療の効果を上げるには医師と看護師、介護士の密接な連携が必要になります。長岡市医師会（厚生労働省の戦略研究の一環で、地域にがん緩和ケアを普及するプロジェクトチーム）に選ばれ、〇七年から活動を始めています。本年度からは県と医師会、専門医が協力して医師や看護師、介護士に対する研修も計画しています。本県にがん緩和ケアが普及する日もそう遠くないでしょう。（県医師会）